# 法政大学学術機関リポジトリ

### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

## 怪鳥ジロンド(〈特集〉文芸ゼミ創作作品集)

### 萩原, 茜

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
64
(開始ページ / Start Page)
121
(終了ページ / End Page)
124
(発行年 / Year)
2001-07-14

https://doi.org/10.15002/00020189

母の中でその思いは強くなっていった。 はだった。確かに自分は走った。息を切らして走れば走るほど、とれは遠い、今そうして走っているからだだけが覚えている記るのではないかという気がした。母はふと、自分はいつかもこのように夜中、走ったことがあはわからなかった。辺りには、こどもの匂いしかしなかった。

走り続けて母はついに、大きな川のほとりにたどり着いた。 走り続けて母はついに、大きな川のほとんどんちかづいているの句いがみつけられた。母はそれを追った。驚いたことにこは川の側で二、三回、行ったり来たりして、それから弾みをつどもに、この川の流れをこえられるはずがない、と思った。母どもに、この川の流れをこえられるはずがない、と思った。母川の手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこれの手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこれの手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこれの手前で、こどもの匂いは消えていた。母は迷った。あのこれの手前で、こどもの匂いは消えていた。

でいっぱいだった。

でいっぱいだった。

その結び付きはまだ混沌として、一致しながら母は、増していく不安と例の記憶が、自分の中で結び付頂上までいくと、切り立った崖になっているはずだった。登り正さともの匂いは山を上りはじめた。草ひとつ生えない岩山で、

母は少しほっとして、だが次の瞬間はっとした。これから何がた。こどもは上を向いて、頂上を指してまっすぐ走っていた。頂上が見えてくると、少し先にこどもの姿があるのがわかっ

起こるのかわかった。

光を求めて走ってきたのだ……。 
空からすっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようと 
空からすっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようと 
空からすっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようと 
空からすっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようと 
空からすっと光がさした。雲が破れてそれはあらわれようと

は、ここのなどで見ば、ここののいとのだったこのでは、いればなの母も、そうしてある崖から飛び下りたのだった。 ただ。こどもをいかせないために、と彼女はつぶやいていた。 たで鳴いた。立ち止まったこどもを尻目に、母は崖から高く飛気にも止まらない様子だった。母はさっきよりもさらに、高いなって、それでもいっしんに月をみつめていた。崖のことなどをは走ってくるこどもをみつめた。こどもは全身よれよれに

ていった。 (終)その場で二、三度回り、月をもう一度見上げてから、山をおりこどもの敏感な鼻は、すぐに血の匂いをかぎつけた。かれは

# 怪鳥ジロンド

萩 原 茜

な果実を食うことで生きている、真っ黒い大きな鳥だ。た。ジロンドは動物や植物の夢を渡り、その夢の中の最も美味・峰岸高雄の夢に落ちてから、ジロンドは身動きがとれなくなっ

かった。 電雄の夢にひとりで閉じ込められても、寂しいと思うことはな ないて生活する彼らが同じ種の仲間に出会えば、それは獲物を よも美味な果実とは一つの夢に一つしかない。夢から夢へ渡り で生きる。群れをなす暮しをしていないし、彼らの滋養である ジロンドの種は、卵として産み落とされた時からひとりきり

あるとかいう特徴を持ったものは滅多にあらわれなかった。界で彼は強者だった。峰岸高雄の夢には凶暴であるとか獰猛での見る夢からでていけないというだけのことで、むしろその世とは無縁だった。身動きがとれないといってもそれは峰岸高雄・・、沈黙はほんの少しで新しい夢を見るので、ジロンドは飢え峰岸高雄は良く寝た。そしてまた良く夢を見た。幾つも幾つ

大空への上昇とそれにつぐ下降を繰り返し楽しんでいた。台は最も好むところで、果物や小動物を気ままについばんでは、近くかもしれない。ジロンドは猛禽だからこういった類いの舞にいた。水がごうごう流れる音も聞こえたから、アマゾン川のそのとき、ジロンドはどうやら熱帯雨林のイメージの夢の中

飛び、辺りを見回してももはや自分しか存在しない空の高みをを蹴り、鬱蒼とした木々の間を空にむかって斜めに切り裂いてこらなかったから、彼には関係のない話だった。ジロンドは地明な壁に頭をごつんとぶつける、ということもあるのかもしれ明な壁に頭をごつんとぶつける、ということもあるのかもしれずを蹴り、鬱蒼とした木々の間を空にむかった。ジロンドは地であるらしかった。もしかしたらもっとはるか上まで飛べば透

開いて言った。
明いて言った。
の茂みの中に、何か赤い点のようなものがあるのが目に入った。
が生物ではなく、意思や攻撃性を持たぬらしい大きな布である
ことがわかったので、射程距離を推測するのをやめ、ばさ、ば
さ、と翼をはためかせて、それのすぐ側の地面に足をつけた。
ことがわかったので、射程距離を推測するのをやめ、ばさ、ば
さ、と翼をはためかせて、それのすぐ側の地面に足をつけた。
ことがわかったので、射程距離を推測するのをやめ、ばさ、ば
さ、と翼をはためかせて、それのすぐ側の地面に足をつけた。
でいた。暫くじっとジロンドのことを見ていたが、やがて口を
れいた。

「いた。

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのがあるのが目に入った。

「いたのは、

「いたのがあるのが自に入った。

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたのは、

「いたが、

「いたのは、

「いたが、

「いたがいにたが、

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「いたが、

「君は、一体どうして僕の夢の中にいつもいるんだ。」

と呟いてから、話し始めた。と呟いてから、話し始めた。と呟いてから、話し始めた。峰岸高雄はそれをきちんと畳んでパだきさになってしまった。峰岸高雄はそれをきちんと畳んでパ大きさになってしまった。峰岸高雄はみるみる縮んで、ハンカチほどの大きさになってしまったことなどを峰岸高雄に説明した。峰岸高雄されているうちに赤い旗はみるみる縮んで、ハンカチほどの大きさになってしまった。峰岸高雄はいちいちうん、うん、と首を振りながらジロンドの話を聞き、ジャマの胸ポケットにしまい、君と話せるとは思わなかったよ、ジャマの胸ポケットにしまい、君と話せるとは思わなかったよ、ジャマの胸ポケットにしまい、君と話せるとは思わなかったよ。

子供みたいな姿をしているけれど、本当はもう少し年をとって僕は毎日寝てばかりいる。僕は重い病気なんだ。今はこんな

り、起きたりの生活だった。今はもう本当の寝たきりだ。いる。でも、この年格好の頃にはもう病気になっていて、寝た

たり、機械を使って会ったこともない外国の人と話すことだっ こにも行けない分、見舞いにきてくれる友達の話を聞くのも楽 僕が考えるのが好きだったそういうことを考えることもできな てできたから、僕の心の中までしいんとしてしまうことはなかっ 返ることになったけど、本を読んだり、画集や百科事典を広げ らゆるものに変わり、それがなんで僕だといえるのかわからな 思い当たる節がない場所、色々なところへ行った。僕の姿はあ きたかった場所、行きたくなかった場所、良く知っている場所、 たんだ。すると、夢を沢山見るようになった。夢の中で僕は行 くなった。僕はほとんど一日中眠っていなければならなくなっ 中にいる方法とか、永遠になくならないケーキについてとか、 最近になって僕の体は本当に悪くなった。いつまでも夕焼けの た。……まあ、時々はやっぱり寂しかったけどね。……でも、 しくてたまらなかった。友達が皆大人になり僕の枕元は静まり なお菓子を持っていたとする、僕がそれを欲しいと願ったとし こつを身に付けた。初めから見たい夢をみられるわけではない になった。でも、 顔付きでね。僕はそうして夢の中でも楽しむことができるよう たら、その人は僕に必ずそれをくれるんだ。僕の望む最上の笑 けれど、例えば夢の中で擦れ違った女の人がとても美味しそう いこともあった。僕はやがて、夢を自分の好きなようにできる ……僕は色々なことを考えるのが好きだった。自分の足でど 君だけは僕の思い通りにならなかった、と峰岸高雄は言った。 ある日、黒い鳥が、つまり君が現れたんだ。

君はたいてい僕の視界の端を一度かすめるかかすめないかぐら君はたいてい僕の見えないところまで飛んでいなものを残ら、僕の夢はひと味足りない、鮮やかな疲れみたいなものを残ら、僕の夢はひと味足りない、鮮やかな疲れみたいなものを残ら、僕の夢はひと味足りない、鮮やかな疲れみたいなものを残ら、僕からは姿の見えないところまで飛んでいってしまった。ずれ、と願って撃ったいならでも君はものすごいスピードで旋回し、僕の夢の端っこのた。でも君はものすごいスピードで旋回し、僕の夢の端っこのた。でも君はものすごいスピードでが回し、僕の夢の端っこのた。でも君はものすごいスピードでが回し、僕の夢の端っこのた。でも君はものすごいスピードでが回し、僕の夢の端ってかいだったけど、どうもある頃から夢があまり楽しくなくなってかいだったけど、どうもある頃から夢があまり楽しくなくなってかいだったけど、どうもある頃から夢があまり楽しくなくなって

<del>---- 123</del>

いことがあるんだけど、聞いてもいいだろうか。」一番の果実を食べてしまっていたからだ。僕は君にまだ聞きたないからなんだな。僕の夢が楽しくなくなったのは、君がその君が僕の思い通りにならなかったのは、君がもともと僕の夢じゃわなかった。今日こうして話すことができて、色々わかったよ。「君と話をしてみたいと思っていたんだ。でもその願いもかな

の夢の中にいた。……ときも僕は確かにいつも寝ているけれど、でも夢を見ていないときもあると思うんだ。夢と夢の間とかね。そういうとき、君は一体あると思うんだ。夢と夢の間とかね。そういうとき、君は一体とうにと答えた。しかし体が動かせないわけでも狭いところに押し込められているわけでもない。暗くて先が見えないなど、足元にも頭上にも本当に何もないぶん、俺は限りなく広ぶん、足元にも頭上にも本当に何もないぶん、俺は限りなく広ぶん、足元にも頭上にも本当に何もないぶん、俺は限りなく広ぶん、足元にも頭上にも本当に何もないぶん、俺は限りなく広ぶん、足元にも勇だけを感じている。それにああいう静かな、まぶしさのない夢を見るものもいる。長く生きた木の夢などあれにとても良く似ていて、違うのは、夢の中でなければいくら探しても夢の実がみつからないということだけだ。……僕はもうすぐ死んで夢も見なくなると思うんだけれど、そうしたら君はどうなるんだろうか。お前が死んだ瞬間俺は違う夢に飛んでいくことができるだろう。以前、眠りながら死んだコアラの夢に居合わせたことがあるが、気付いたらユーカリの木に住む虫の夢の中にいた。……

とジロンドの目をじっと見た。いていた。その余韻がすっかりなくなってから、最後の質問だ、いていた。その余韻がすっかりなくなってから、最後の質問だ、峰岸高雄は、ジロンドの声を全身に響かせるように静かに聞

なかったと聞いたよ。」て知ったんだ。狼に育てられた少女は、一生人間の言葉を話せていないのに、一番おいしい実が栄養になるってこと、どうしんで自分は夢を渡る生き物だってわかるの。誰からも教えられ「君たちは生まれたときから一人だっていうけど、じゃあ、な

度ほどぱち、ぱち、とした。ジロンドは少し首をかしげ、両瞼に鋭くくりぬかれた目を二

ともな。なにしろ、俺は人間じゃないんだ。」俺が俺だということを知っていた。ジロンドという名だってこ「さあな。でもそれは人間の話だろう。俺は生まれたときから

その視線を受けすぐに胸ポケットに手をやった。視線を集中させた。峰岸高雄はそうか……と呟き黙り込んだが、そう答えると、ジロンドは峰岸高雄のパジャマの胸の辺りに

「これ、だろう。」

峰岸高雄はそれを素早く口に放り飲み込んだ。大きさの堅い果実になった。ジロンドの目がギラリと光ったが、峰岸高雄の手の上で赤い旗はくるっと丸まってスモモほどの

「僕は君みたいになってみたかったんだ。」

峰岸高雄が言い終わる前に、怪鳥ジロンドは峰岸高雄を丸呑

# モンスター

起きると、私はそう思うことで、自分と衝動とのバランスをときっと私の中には何かがいる。背負いきれないほどの衝動がから、思いっきりハジケてみたくてうずうずしている。電車に轢かれて自分を壊してみたり、とにかくもう何でもいい電動が止まらない。誰かを殴ってぶっ壊してみたり、わざと

わけではない。もしかしたら次の瞬間、自分でも気付かぬうち

ろうとしていた。けれど、そうしたからといって衝動が止まる